
コンコン家族

ともみつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンコン家族

【Nコード】

N4125E

【作者名】

ともみつ

【あらすじ】

俺の家って何か変？普通だよな？母親が好きな俺。俺が好きな姉貴。娘が好きな父親。親父を愛してる母親。ほら、普通だろ？家族ってこういうものじゃないの？

（前書き）

暇つぶしに書いてみた短編です。

もっと濃い内容にしようか迷いましたが、書きながら飽きてきたので途中で切り上げました（苦笑）
気楽な感じで読んでください。

おっす、おら^{しゅう}~~しゅう~~空。宜しくなっ！

はいそこ、パクリかよとか思わない。あっちは悟空。俺は~~しゅう~~空。漢字が違っただよ、漢字が。ついでにこの挨拶は小学校の頃だけしかしてないから。いや、マジで。高校にも上がって、んな恥ずい真似するアホじゃないんだよ、俺だって。遠き日の思い出ってやつだ。「明日美、もう行ってしまうのか……？」

はい来た。今日も賑やかなウチの始まりだ。

「ねえ、~~しゅう~~空。一緒に行こっ」

ほいこれまた来た。親父の一言から始まるウチ。まあ俺としては結構普通だと思っただけど、この前ウチに遊びに来たダチが何か変って言ったわけよ、俺の家のこと。だから俺の家は変じゃないってことを今日は教えてやるうじゃないか。

「なあ、明日美。学校なんてものは無理に行く必要はないんだぞ？勉強ならお父さんが見てあげるぞ？」

「え？ マジで？ 休んでいいの？」

「~~しゅう~~空は学校に早く行かんか、この馬鹿息子め」

「んだよお。このドタコン親父め」

姉貴だけ鼻屑とかマジありえねえ。

「はいはい。あなた、子供たちは子供たちの考えがあるんだから。それよりもあなた、まだ出勤には早いわよね？」

母さんが親父に擦り寄る。もう目が恋に恋する女の目だ。おいおい朝から俺の前でそんなことは止めてくれよ。俺、グレるぞ。

「ねえ、~~しゅう~~空。今日はね、お姉ちゃんがお昼のお弁当作ったの。お昼は一緒に食べようね？」

姉貴が弁当箱と一緒に笑顔を俺に振りまいてくる。まあ弟が言うのも何だけどさ、姉貴はそこに美人だと思っわけよ。それで弁当作ってくれるとか嬉しいは嬉しいさ。家事とか良くしてるから保

障はあるし。でもさ、その笑顔で近づいてくんのは止めて欲しいな。
「もらつとくけど、昼はダチと食うから」

「な、何でっ？ お友達とお姉ちゃんとかどっちが大事なのよっ？」
わお、ダチを一括りに自分を比べるか。すげえ自信だな。

「まあ家族は大事だけど、学校じゃ友達っしょ？」

「ひ、酷い……。私が早起きして冴空の為だけに作ったのに……」
泣き崩れるわが姉。ちなみに嘔泣きつてのはもう分かってるから、
懐柔はされない。

「何っ？ 明日美、お父さんの分もあるんだよな？」

「はい、あなた。私の特製お弁当よ。明日美のより美味しいわ」

そして親父よ。あんたも良い年した男なんだから、娘に固執する
なつて。母さんの弁当があるだけ羨ましいじゃないか。

「じゃあ親父。その弁当とこれ、交換する？」

「良いのかっ？」

「良いよ」

そして親父の失態をこれ以上見たくない俺は、姉貴に渡された弁
当を親父に渡す。その代わりに母さんの弁当を受け取ろうとした。

「だめっ！」

「だめよっ！」

ああ。やっぱり今日もだ。案の定、俺が差し出した弁当は姉貴が
奪い取り、親父が差し出した弁当は母さんが奪い取った。

「何で？ 俺、母さんの弁当が良い」

姉貴のも味は悪くないけど、細工が恥ずかしいんだ。今時ごは
んにハートとか惜しげもなく乗せられても、学校で辱められて死ね
てしか受け取れない。

「父さんも明日美の手作り弁当が良い」

親父も姉貴が俺の好物を詰め込んだ、比較的油物弁当の方が良い
って言ってるのになあ。俺は健康考慮の母さんの弁当が食べたい。

「これは冴空の為に作ったの。冴空以外の人が食べるなんて、絶対
にダメっ」

姉貴は奪い取った弁当を俺に差し出す。

「良い？ 冴空。これはお姉ちゃんの冴空への愛情がたっぷり入ってるの。私は冴空にだけ食べてもらいたいの」

ずいっと姉貴が顔を近づけてくる。近いって。

「こ、こらっ！ 冴空。明日美にそんなに近づくんじゃない」

「いや、姉貴が寄って来ただけじゃん」

「そうよあなた。あなたもいい年して娘に干渉しないの。あなたには私がいるじゃないのよ」

そして母さんは親父に寄る。今にもキスしそうなくらいに。

「ちよっ、親父だつて母さんにくつつきすぎだろ。もうちよつと子供の前で遠慮しろよ」

「まったく、この親父は母さんがいるつてのにドタコンも大概にしるよ。」

「さ、冴空。お姉ちゃんと一緒に学校行つて、お昼休みは一緒にお弁当食べましょ」

「あ、ちよっ、姉貴待ってって」

母さんの弁当が。

「だゝめ。冴空はほんと恥ずかしがりやなんだから。お姉ちゃんがいないと何も出来ないんだから、遠慮することないのに」

「こら、冴空。お前、姉弟だからって家の中で腕を組むな。そんな格好で外になんか出るんじゃないぞっ」

いや、腕を絡めてきたのは姉貴だ。俺は外そうとしてんだよ。

「あん、もお、冴空つたら。そんなにお姉ちゃんと一緒に歩くの嫌なの？」

「いや、別にそんなことはねえけど……」

「ああん、冴空っ」

抱きつかれた。首に腕回されて、胸に柔らかいもんが。

「ああっ！ こ、こらっ！ お前たち、何してるんだっ！」

飛んでくる親父の怒声。いや、別に嬉しいとかそう言うのではないんだけど。姉貴だし。

「まあ、あなただったら。そうして欲しいなら私に言ってくればい
つだって、してあげるのに。子供たちが居ない時はもつとすごいこ
とだって……」

「ちよっ、母さんっ！ 朝から何してるんだよっ」

母さんが俺に抱きつく姉貴みたく、親父に抱きついた。くそ、親
父ずりいぞ。ぜってえ親父と母さんお二人きりになんかしてやらね
えからな。

「もお冴空。良いじゃない。お母さんたちはほっておいて。冴空の
ことはお姉ちゃんが全部してあげる。冴空が望むなら、何だって……
ねっ？」

ねっ？ じゃねえよ。禁忌犯せってか？ 冗談じゃねえって。

「やだよ。っーか姉貴もさっさとブラコン卒業しろよ。家ならまだ
しも、学校内じゃ恥ずいんだよ」

周りの目とか男子の視線とか痛いし。

「何よ、照れちゃって。お姉ちゃんは気にしないんだから、遠慮す
ることないのよ？」

「あ、明日美っ！ お前がそうやって冴空を甘やかすから、冴空は
いつまで経っても自立出来ないんだぞ」

いや、まだ高一だって、俺。むしろ母さんの愛情を注いで自立へ
の道を徐々に知る歳じゃね？

「良いの。冴空のことは私が一生面倒看てあげるんだから。彼女と
か絶対認めない」

「いや、それはちよっときついぜ、姉貴？」

「冴空は、私のこと、嫌いなのか？」

潤った目が見上げてくる。いつの間にか姉貴よりも背高くなった
な、俺。

「いや、別に嫌いじゃないけど……」

「冴空っ！」

「ちよっ、姉貴っ、くっつきすぎだったの」

「お、おいっ、お前たちっ！」

「もお、あなた。朝から怒ると血圧上がるわよ。ほら、私の胸で落ち着いて」

「なっ！？ か、母さん、何してんだよっ」

母さんが親父を抱きしめていた。俺も姉貴に抱きしめられているけど、羨望度と満足度が違う。

「ほら、冴空も明日美も早く学校行きなさい」

しっし、と母さんが俺たちに手を振る。そして親父に抱きつく表情が怪しい。俺たちが学校行ってから何しようとしてんだよ、こんな朝から。ぜってえ行かないぞ。

「うん。じゃあ行ってきます。ほら、冴空。お姉ちゃん気分良いから腕組んで、恋人つなぎで行こっ」

不意に姉貴が俺の腕に腕を絡ませて、そのまま俺の手のひらに自分の手のひらを重ねて指を絡めてきた。

「ちよっ、やだっ。離せよ」

「んもお、恥ずかしいのは最初だけよ。周りの目なんか気にしてたら疲れるわ」

そんなんじゃない。どこの世界に姉貴と腕組んで恋人つなぎして登校するアホがいんだよ。「お、おいこら。良いか？ お前たちは姉弟なんだぞ。節度を持たんかっ！」

「うるせえよ。朝から母さんといちゃいちゃしてんじゃねえよ、女たらしが」

「やだ、冴空ったら。あんまりお父さんのこと悪く言っちゃだめよ？」

「冴空。お前親に向かって何だその口はっ。いいから明日美から離れんかっ」

「お父さんっ！ 冴空のことを悪く言うのは止めて。私、冴空のことを悪く言う人間は大っ嫌いな」

「なっ！？ ちよっ、ちよっと待て、明日美。お父さんはな、お前のことが心配だから言うわけだ……」

「あなた、子供はいつかは巣立つものよ。私たちの時もそうだった

でしょ？ それに私に誓ったじゃない。お前のことを生涯愛し続けるって。ねえ、あなた。久しぶりにお出かけしない？ ゆっくりと、そう、二人っきりでゆっくりしましょ？」

「ちよっ！ ダメだってそんなの。俺たちのことはどうすんだよ？」

「平気よ。家のことは私がするから、二人とも楽しんできたら？ 有給使って二人で温泉とか行っておいでよ」

「ば、馬鹿を言うなっ。お前たちを残して行けるわけないだろう。行くなら明日美、お前も一緒に良いだろう？」

「俺が行きたい」

「お前はいい加減自立せんかつ。大の大人が見苦しいだろ」

あんたに言われたくないぞ、それは。

「ダメよ、冴空。たまにはお母さんたちにもゆっくりしてもらわないと。それに私たちもたまには二人っきりの生活とか良いじゃない？ 新婚みたいで」

顔を赤らめて姉貴が外そうとしていた腕に力を込める。勘弁してくれ。親父たちを二人きりにさせたら弟妹が出来ちまう。んなこと反対だぞ、俺。

「し、新婚だとっ！？ 許さんぞっ。父さんはそんなことは許さんぞっ」

「はいはい、あなた。子供たちはからかってるだけよ。ここは素直に子供たちの厚意を受け取りましょう？」

「ちよっ、ダメだって、母さんっ。こんな親父より子供の方が大事だろっ？」

「こんなとは何だ、こんなとはっ。お前もこの家の男ならいつまでも明日美に甘えるんじゃないっ」

「私が甘えて欲しいの。だから冴空を追い出すようなことは言わないで。冴空を追い出すって言うなら、私も冴空と出て行くからねっ」

「なっ！？ あ、明日美、お前はそんなことはしないでいいんだぞ？ お前はお父さんが幸せにしてやるからなっ？」

「あなた。子供はいずれ出て行くんだから、私と幸せをまた作るの

よ？」

「母さん、俺は出て行かないよ？　俺が親孝行して母さんを幸せにするんだから」

はい、話は途中だけど、とりあえず今朝はこんな感じだ。

このドタコン親父にハズコン（？）母さんに、ブラコン姉貴とマザコン俺の家。こんなの普通だよな？　どの家だってこんな感じだろ？　ちよつとウザいけど仲は良いんだぞ？　家族なんだから別に悪いことはないよな？　とりあえず一線は越えてないし。あ、でも、母さんになら俺、良いかも。

「だめだったらダメ。冴空はお姉ちゃんと幸せになるの」

「何言ってるんだ、明日美。お前のことはお父さんだけが幸せにしてやれるんだぞ」

「あなた。あなたは私を幸せにするんでしょう？」

「ああ、もお。母さんのことは俺が幸せにしてやるって言ってるじゃん」

まあこんな家族だけど、どおよ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4125e/>

コンコン家族

2010年10月8日15時02分発行